

2024年2月4日（日）主日朝礼拝説教

『その資格はない』井上隆晶牧師
列王記上8章46～50節、ルカ福音書15章11～24節

①【世俗のこの世、墮落した世界】

この譬えで父親は神様を、二人の息子は私たち人間を象徴していますが、ここでは兄はユダヤ人を弟は異邦人を象徴しています。ただし兄も弟も私たちはどちらにもなり得ることを知っておかなければなりません。下の息子は「**私がいただくことになっている財産の分け前をください**」（12節）と言うと、父は黙って兄にも弟にも財産を分けてあげます。弟はそれをお金に変え、遠い国に旅立ちました。神から遠い国とは「**この世**」を象徴しています。この世、世俗の世界には神は登場しません。人間のみの世界です。

●先日麻生副総理が上川外務大臣について女性蔑視の発言をしました。又かと思いました。ネットを見ていると「誰々がSNSでこう発信した、誰々がこんな発言をした」とあります。みんな自分の正義に照らして好き勝手に語っていました。正義が飛び交い、誰もが裁きます。疲れます。誰も神の言葉を聞きません。誰も神に従いません。これがこの世です。人間のみです。神を無視してすべてを企み、すべてを語り、すべてを行動します。

こんな世の中で人は幸せになれるのでしょうか。弟はこの世に憧れ、自分の欲しい物が手に入れば幸せになれると思いついで何にでも手を伸ばし、放蕩の限りを尽くして財産を無駄遣いしてしまいます。更にひどい飢饉が起こり、食べるのにも困り始めたので、彼は豚の世話をするようになります。豚はイスラエルでは汚れた動物ですから、彼は生きる為に心と身体を汚したことを意味しています。悪魔は囁きます。「現実には厳しいのだ、生きる為には悪と妥協しなさい、皆しているよ」こうして彼は豚以下になります。

●私たちも同じです。無知はせつかくの恵みを無駄にし、実を結ばせないものために生命を、時間を、若さを浪費させます。すべての幸せは過ぎ去り、二度と戻ってきません。失って初めて私たちは与えられていた幸せに気がつき、それをなげもつと喜び、大切にできなかったのかと後悔します。いくら豊かに与えられても、人間はそれを満足できず、恵みをしっかり受け取る力がないのです。それが罪の恐ろしさです。

人が神以外のものを手に入れても、決して満たされず、幸せにはなれないことを教えています。

②【回心とは～我に返り、立ち上がり帰ること～】

飢えが究極までいった時、「彼は我に返って言った」（ルカ15:17）とあります。「我に返る」とは何でしょう。英語では「when he come to his senses」です。「正

気に返る、迷いがさめる」という意味です。口語訳では「本心に立ち返って」と訳しています。息子は故郷と父の家を思い出しました。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」(17 節)。彼は故郷の温かく満たされた日々を思い出します。そして自分の貧しさに気がついたのです。人間の心と身体には「回復しよう、善くなろう」とする神様が下さった「自己回復能力 (レジリアンス)」が備わっています。それは私たちの中に埋め込まれた神の像、神性の断片です。これは罪をもってしても破壊できないものです。愛された人はその能力が強く、愛されなかった人は弱いのですが、愛はそれを開花させるエネルギーになります。

●心の病の勉強会で、虐待について学びました。アメリカの研究では虐待された子供の三分の一は同じように虐待をするが、二分の二はしないというデータが出ています。その虐待の連鎖を止めることができた二分の二の人たちには共通点が三つありました。(1) 自分の人生の中に、自分を愛し受け入れてくれる信頼できる温かい人がいたこと。(2) 自分も虐待してしまうのではないかという自覚があったこと。(3) ストレスを感じた時に、それを自分の言葉で表現できたということ。教会は、良い隣人になる使命があります。それでその人の能力が開花するからです。

息子は父にこう告白しようと決心します。「私は天に対してもお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。」(18~19 節) ここで彼は自分の正しさも、息子としての権利も放棄していることをお気づきでしょうか。最初はそうではありませんでした。「私がいただくことになっている財産を下さい」(12 節) といって自分の権利を主張しています。彼は立ち上がって出かけます。回心とは神の元に帰ることです。回心・悔い改めは、罰を恐れて悪事をやめることではなく、むしろもっと積極的なものであり、善への回帰、善いものを憧れることです。そして失った美しさを手に入れるために決断して立ち上がり、それを行動に移し、旅を始めることです。

③【天国は神の憐れみで入るところである】

すると「遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻し」(20~21 節) ます。息子は罪の告白をしようとしませんが、父はほとんど聞いていません。すぐに息子に最上の服を着せ、指輪を渡し、履物を履かせます。それは「朽ちない体」、「神の子の資格」、「自由」を象徴しています。これらは私たちが正しいから与えられるものではなく、神の憐れみによって一方的に与えられるものです。このすべての行動を起こさせるものが神の「憐れみ」です。英語では「Father... was filled with compassion for him」です。「息子に対する憐れみでいっぱいになり」です。憐れみが神を支配しているのが分かります。この憐れみゆえに人は赦され、救われ、神の国に入れられるのです。天国とは「父の憐れみの国」なのです。天国では誰も自分の正しさも権利も主張できません。天国ではそれを捨てなければならないのです。まじめな生活をしていた兄

は、「自分は言いつけに背いたことは一度もない、それなのに宴会もしてくれない。不公平だ！私は正しい！」と言って、自分の正義と権利を捨てられなかった人です。だから彼は体が天国にいても心は天国から遠いのです。

父は言います。「肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」(23～24 節) 命である神から離れることが死であり、神に帰ることが命です。息子は父の元に帰ったので生き返りました。父は喜び、祝宴を開きます。そのひな形が聖餐です。神が何を喜ばれ、何を望まれるのかがお分かりでしょう。あなたが失った物を償うことではないのです。あなたが帰ることなのです。具体的には教会に帰ることです。教会は神の国のひな形であり、天国の香りがします。そこは私たちの本国であり、永遠の家です。私は教会に帰ると、なぜか非常に懐かしさを感じるのです。なぜでしょう？子どもの頃に感じた平和、無条件の愛、喜びと、安らぎがそこにはあります。父なる神が両手を広げて待っていてくれるのを感じます。その影を私は両親を通して地上で味わいました。しかし教会にはその本体があるのです。ある本の中に、礼拝を終わって教会から出て来た信者たちについて書かれている箇所がありました。

●礼拝から出てくると、われわれの村のすべての男も女も「テオフォロス」つまり神を担う者となっていた。だれもかれも聖体をいただいていた。だから彼らの血管の中には神の血が流れていた。彼らは神の子であり、神化されていた。確かにこの人々は粗野で、哀れで、貧しい農民たちであった。…しかし教会から出る時、彼らは自分たちのうちに神を担っていたのである。…人がランプなりロウソクなりを運ぶ時、その炎で顔は輝いている。自らの内に、光の中の光である神を運ぶ時、肉体全体がそしてからだ全体が変容され、美しく飾られ、内部から照らされるのである。…自らのうちに神のまばゆいばかりの光を担う人々の顔以上に美しい肉の皮膚を見たことがない。

息子はすべてを失って初めて、決して失われない父の愛を知りました。また、いつでも帰れる家があることを知りました。私たちも同じです。私たちがすべてを失っても、決して失うことのない変わらない神の愛があります。そして神の家があります。そこがあなたの最初にして、最後に帰る住まいなのです。だからつまらない自分の正義や権利など捨ててしましましょう。そしてただ神の大きな憐れみの前にひれ伏して、神を賛美しましょう。